# 私小説 名作選 下

中村光夫［選］
*nakamura mitsuo*

日本ペンクラブ 編

藤枝静男 *fujieda shizuo*
大岡昇平 *ōoka shōhei*
島尾敏雄 *shimao toshio*
水上勉 *mizukami tsutomu*
安岡章太郎 *yasuoka shōtarō*
庄野潤三 *shōno junzō*
遠藤周作 *endō shūsaku*
吉行淳之介 *yoshiyuki junnosuke*
田中小実昌 *tanaka komimasa*
三浦哲郎 *miura tetsuo*
高井有一 *takai yūichi*

講談社文芸文庫
*Kōdansha Bungei bunko*

# 私小説名作選 下

nakamura mitsio
中村光夫[選]
日本ペンクラブ 編

常州大学図書館
藏书章

講談社 文芸文庫

私小説名作選 下
中村光夫 選　日本ペンクラブ 編
二〇一二年六月八日第一刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2・12・21　〒112-8001
電話　編集部（03）5395・3513
販売部（03）5395・5817
業務部（03）5395・3615

デザイン——菊地信義
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社
本文データ制作——講談社デジタル製作部
©Kodansha bungeibunko 2012, Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部宛にお送りください。送料は小社負担にてお取替えいたします。なお、この本の内容についてのお問い合せは文芸文庫出版部宛にお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

講談社
文芸文庫

ISBN978-4-06-290159-8

# 目次


私々小説　藤枝静男　七
歩哨の眼について　大岡昇平　二一
家の中　島尾敏雄　三三
寺泊　水上　勉　六一
陰気な愉しみ　安岡章太郎　七八
小えびの群れ　庄野潤三　九四
男と九官鳥　遠藤周作　一一六
食卓の光景　吉行淳之介　一四九
魚撃ち　田中小実昌　一六一

拳銃　三浦哲郎　一九〇
仙石原　高井有一　二〇四
対談解説　私小説の系譜　中村光夫　水上勉　二三七
参考資料　私小説について――『日本近代文学大事典』より　二四五
著者紹介　二六二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 私小説名作選 下

*nakamura mitsuo*
中村光夫［選］
日本ペンクラブ 編

講談社 文芸文庫

# 目次


私々小説　藤枝静男　七
歩哨の眼について　大岡昇平　二一
家の中　島尾敏雄　三三
寺泊　水上　勉　六一
陰気な愉しみ　安岡章太郎　七八
小えびの群れ　庄野潤三　九四
男と九官鳥　遠藤周作　一一六
食卓の光景　吉行淳之介　一四九
魚撃ち　田中小実昌　一六一

拳銃　三浦哲郎　一九〇
仙石原　高井有一　二〇四
対談解説　私小説の系譜　中村光夫　水上勉　二三七
参考資料　私小説について――『日本近代文学大事典』より　二四五
著者紹介　二六二

# 私小説名作選

下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 私々小説

藤枝静男

二月四日日曜日に弟の一周忌と母の四十九日の法要をやった。日数から云えば、弟の方はちょうど一年だが母の方は死後四十二日目で七日早すぎた。しかし私は浜松に住み弟の遺族は島田に住み、互いに打ち合わせたうえで親戚に通知して藤枝の寺へ集まるのだから、重複を避けて一日にまとめたのである。弟と母も、もし幽明の境をさまよっているのなら、ひさしぶりに帰って本堂に位牌を並べて坐り、互いに顔を合わせることを喜ぶだろうとも考えた。

しかし寺に行ってみると、二人の祭壇は本尊の左右に離れて別々にもうけられていて、

住持はそれぞれの前に坐って同じ経を同じ手続きで読んだ。弟のそれがすむと大きな分厚い座蒲団を下げて私の鼻先きを横切り、母の位牌の前に移った。つまり別々の法要であることを証明するために無駄な繰り返しをやってみせた。寒中の本堂の冷え切った畳に二倍の時間を正座している私は不愉快になっただけであった。私は家の仏壇または寺の墓を見ると迷信的にそこに魂が存在しているような錯覚に陥るが、反対に僧の読経がはじまると途端に「何もない」と悟るという習慣がある。この習慣のせいで、このときもすっかり白けて肉体オンリーとなったのであった。

弟は劇烈な腹痛で入院し、十二指腸潰瘍、穿孔による急性腹膜炎の診断のもとに手術を受けた。経過も症状もX線検査もその典型的な像を示していたから、医者である本人は勿論のこと家族も担当医師も予後については楽観した。病院に駈けつけた私にも気持ちの余裕があったので、ちょうど部屋から運び出される寸前の弟に

「よかったな」

と声をかけたのであった。弟は前置麻酔の注射で視点が少しぼやけていたが

「うん」

と答えて微かに甘えるような笑顔をつくってみせた。私はしかし約一時間後に手術室から出てきた甥から廊下に呼び出されて、十二指腸潰瘍が二次的続発的のものであり真の原

因は意外にも膵臓癌であったことを知らされたのである。弟の長男でやはり医師である甥は手術に立ちあっていて、胃の裏側にかくされた膵臓が末期に近い壊死状態にあることを執刀者から示され、腹腔が濁った腹水で充満し、肝臓の表面は汚穢な苔状の浸出物によって厚く覆われていて横隔膜の一部には破裂寸前の膿瘍が形成されていることも目にして、それを同じく医師である私に告げに来たのである。

「そうか。それじゃあどうすることもできんな」

「ええ」

「よしわかった。とにかく終わるまでついててやれ」

「ええ」

甥を手術室に戻し、廊下の端の汚れた灰落しの前の壁にもたれて私はしばらく身心脱落をこらえていた。近く死んで行く弟がただただ哀れで、他のことは頭に浮かばなかった。結局、とにかく已むを得ないと思った。膵臓癌では十中十逃れる方法はない。原病がそこにある以上、手術によって一時的に穿孔が縫いあわされても、十日とはもたずに再び穿孔するだろう。また幸運に潰瘍の再発が停止して一般状態が軽快しても、三ヵ月か半年もすれば癌は進行し脊髄に転移して不断の疼痛を呼び、医師である弟は当然癌を疑い、死の恐怖にさらされながら死んで行くほかはないのである。

可哀想は可哀想でそれは避けようがないから、自分だけが自分の分だけ思い知る以外に

ない。しかしできるだけの分量は自分のところで堰きとめて吸収するのがいい。悲しみをひとと頒け合うわけには行かぬ。家族には、弟が自分の病気を楽観したままで、むしろ早く生を終えることを願うようにさとし、また高齢の母と姉には息を引きとるまで真実を告げず不安を告げず、そのためには生前の面会もさせずにすませることを独断で強いるのがよいと思った。自分本位の考え方しかできない傲慢さ、直接の妻や子供にさえ自分の判断を押しつけてそれが彼等の幸福だときめつける無慈悲さが、何時も致命的に私を支配している。そのことを自分で知っている。苛責だってある。

私は病室に戻り、二十分ほどして若い二人の姪が輸血の血を提供するために手術室に呼ばれて直き元気に笑いながら帰ってきた。そしてそれから一時間半ばかりすると、手術は終わり、顔色の蒼白に変った弟は執刀者、看護婦に護られた左右に輸血と腹部からの吸引ドレーンをつけて狭い入口から運びこまれてきた。スタッフが去り、残った看護婦が血圧をはかって

「一一〇です」

と告げて目礼して出て行くと、私は麻酔が醒めるまでの空白の時間を利用して姪たちに栄養をとらせるために二人を連れて夕暮れの街に出た。術後の恢復小康の数日はとにかく希望と喜びの日になるから何も告げない方がいい。私は寒い風と勤めがえりの群のなかで夜の華やかさに移りつつある商店街を、中華料理店をさがしながら覗き眼鏡を見るような

気持ちで歩いた。

私たちが病室に入ると弟は鎮痛の注射で半睡の眼を開いて私たちを眺めた。私が

「よく頑張ったな。それでいいよ」

と云いきかせるように云うと、復誦するように

「頑張った」

と呟いて微笑した。

同じことを十日後に云った。――術後、私は浜松に帰り、電話で弟が元気になり氷を口に含むことを許されたことを知ったが、六日後に癌細胞が組織検査で証明されたことを告げられた。虚栄心を捨て極く僅かの希望を残して般若心経の写経をしていたが、それはやはり供養のためのものになったのである。やがて半臥を許されるようになったが、その翌日から再び出血が始まり、次の日には一〇〇〇ccの下血があって再開腹した結果、縫合部の哆開と二個の新しい穿孔が発見され、手の下しようのない状態に陥ったことを知った。もはや弟は全く絶望であり、従って以後はこのまま苦痛なしに、自らは希望を持ったままで、眠りの継続として死の世界に移らせるよう努力することが最大の希望となった。深い眠りに陥っている弟の傍で、家族四人にこのことを話した。私は眠るために浜松に帰り、翌日酸素テントの中で眠っている弟を見舞い、弟が前夜麻酔から醒めて私を捜し

「兄さんに、僕がもう一度頑張った、と云ってくれ」

と妻に命じたことを伝えられたのである。

弟の出血は今度も手術によって一時停止したが、当然の運命として五日後には最後の出血が開始され、眠ったままの一日半後に弟は五十六年の生を終えた。

この一日半のあいだのある瞬間、彼は急に眼を開いて私を見て

「また頑張ったア」

と云った。三度目の手術を終えて今意識の戻ったところだと自分を錯覚している。そして死に近い朦朧とした頭で子供に帰って私に褒めてもらいたがっているのだ。私は手をきつく握って

「頑張った、頑張った」

と云った。弟は満足そうに笑って眼を閉じた。――三十余年前のある日、私は東京医専二年生の弟から「相談があるから来て欲しい」という葉書きを受取って淀橋の下宿へ行った。彼は四畳半の私からゆずられた机の脚下に蒲団を敷いて寝ていたが、私を見上げて

「三日まえ喀血した」

と微かに笑って云った。そして一番下の引き出しから古血で褐色に汚れ丸められた鼻紙の塊を数個出して私に見せた。このとき私をほとんど絶望的な落胆と悲哀につき落としたのは、私の肉親四人を次々と結核で奪い二人を結核の病床に釘付けにし父を半身不随に陥れ、今また執念深く弟を結核に誘いこんだ運命の不合理に対する憤りであった。弟は私と

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com